

(presented at the Nippon Foundation workshop at the Inter-University Center for Japanese Language Studies in January, 2017)

This is a draft copy. Do not circulate without permission.

ターニャ・コストチカ
日本財団発表

皆さんこんにちは。コストチカと申します。南カリフォルニア大学大学院博士課程に在籍しており、専門は哲学で、道徳心理学や日本の仏教などを取り上げております。仏教哲学の研究は最近のことなのですが、本日は一つの仏教に関するプロジェクトについて発表させていただきます。発表のテーマは親鸞の悪人正機と「造悪無碍」という批判です。まず、末法思想について述べます。次に、末法思想が招いた疑問に対して、親鸞の答えを紹介させていただきます。それから、親鸞の思想に対する「造悪無碍」という批判を発表させていただき、その批判に対して、親鸞の主張を紹介し、最後に、私の親鸞の主張の批判を発表させていただきます。結論として、親鸞の思想は倫理的に悪い行動を許していると主張したいと思います。

それでは、始めさせていただきます。仏教の歴史観からすると、世の中には、三つの時代があるとされています。正法時代と像法時代と末法時代です。末法時代というのは人が最悪で、釈迦の正しい教えがわからない時代のことです。日本の鎌倉時代には、いわゆる末法思想がとても強くなりました。つまり、末法時代に生きていると思っている人が多くなったのです。この末法思想が僧を困らせました。末法時代に生きているなら、二つの疑問が生じます。一つ目は、人が最悪で、正しい教えが分からないということとをどのように解釈したらいいか。つまり、人間が釈迦の教えに従いたくないのか、それとも本当の教えが見つけれられないのかということです。二つ目は、成仏するためにど

うしたらいいかというものです。他の時代に比べると、末法時代に、成仏する方法は同じか、それとも違うのかということです。その疑問に関して、親鸞の答えを紹介したいと思います。

最初の疑問に関しては、親鸞によると、末法時代の人の欠陥は認識論的な欠陥だそうです。人は煩惱に満ちていますので、所詮、「事実は何か」と「善は何か」という質問に答えを探しても、その心理的制限のせいで、見つけれません。歎異抄では唯円（ゆいえん）が親鸞を次のように引用します

（現代語訳）「私には、何が善であり、何が悪であるのか、わかりません。なぜなら、阿弥陀さまがそのお心で善いと思いになるほどによくよくわかったのであれば、善いということが分かったということが言えましょう。また、阿弥陀さまが悪いと思いになるほどによくよくわかったのであれば、悪いということがわかったと言えます。しかし、私たちのようにさまざまな煩惱を持つ凡夫のすることは、この変転極まりない世界において、あらゆることが、むなしくいつわりで真実であるといえるものはなにひとつありません。そうしたなかであって、ただ念仏だけが真実なのです。」

つまり、人間の認識論的な状態が特に悪いのだというものです。

もしそうであれば、二つ目の「往生するためにどうしたらいいか」という疑問は特に難しいものになります。なぜかというと、どうすればいいかと分かるためには、自分の状況を把握し、どのような状態がいい状態かが、おおむね、分からなくてはならないからです。例を挙げると、私が美味しいコーヒーを飲みたかったら、何をしたらいいかを決めるために、どの店のコーヒーがいいかとその店はどこにあるかが分からなくてはいいでしょう。しかし、末法時代の人間が事実は何かが分からず、何がいいかが分からないなら、努力することは無駄でしょう。もしそうなら、諦める以外に、選択があるでしょうか。

努力することが無駄だからこそ、親鸞によると、「善」と呼ばれる人は浄土に生まれません。その人は自分が煩惱でいっぱいの人間だと信じずに、いわゆる自力を通して成仏しようとしませんが、色々な修行をし、色々な経を読んでも、経の意味が分からず、どんな修行が成仏にいいか分からないので、無駄なのです。それに、その「善」と呼ばれる人は自分の力を信じるので、「我」の存在も信じているはずです。しかし、「我」の存在を信じるなら、成仏できません。ですから、親鸞によると、他力を信じた方がいいそうです。他力というのは、阿弥陀の本願の力です。無量寿経（むりょうじゅきょう）によると、阿弥陀は念仏を10回だけ唱えた人が全て浄土に生まれるようにという願いをしたので、誰もが浄土に往生する可能性があります。浄土というのは、天国のようなところで、浄土に生まれた生き物なら、成仏するのが難しくないそうです。

親鸞は浄土に生まれるため、念仏をできるだけ唱えるより、阿弥陀を信頼することこそが必要だと主張しました。いわゆる信心があれば、一回唱えれば十分だと思っていました。一番重要なのは他力を信頼することです。末法時代の人間は皆煩惱に満ちているので、皆悪人です。人間は自分が悪人だと分かり、事実や何をすべきかということなどを考え出そうとするのをやめて、阿弥陀を信頼するしかありません。

その上、親鸞は阿弥陀の本願の対象は悪人だと強調しました。その教えは「悪人正機」と呼ばれています。しかし、どのように、この教えを解釈したらいいかわかりにくいと私は思います。親鸞が書いた著書を見ると、悪人なら、阿弥陀を信頼するのがより易くなるということのように思えます。

親鸞は和讃という歌をたくさん書きました。高僧和讃という集の40番目のものは（現代語訳）「罪のさわりは、そのまま転じられて功德となる。それは氷と水にたとえ

られ、氷が多いと溶けた水も多いように、罪のさわりが多いと転じた功德も多い。」というものです。阿弥陀を信頼するには、善人より悪人の方がいいというわけです。

そして、歎異抄の一番有名な部分は三章です。

（現代語訳）「欲望を捨てることができない私たちは、どのように修行をしても結局は不十分に終わり、迷いの世界を離れることができません。そのような人間をあわれにお思いになって、助けようという願いを起こされたのが阿弥陀様です。ですから、阿弥陀さまの本意は悪人を救って仏にするためですので、ひたすら阿弥陀さまのお力におすがりする悪人こそ、まず浄土に生まれる資格を持っています。したがって、善人でさえ浄土に行けるのであれば、まして悪人が行けるのは当然のことであると、聖人は仰せになりました。」

つまり、悪人が浄土に生まれる可能性があるということだけではなく、阿弥陀の本願の目的は悪人を助けることなのだそうです。ですから、悪人なら、浄土に生まれるのがもっと易しいということになります。

しかし、そのように親鸞の教えを解釈したら、大きな問題が生じます。皆はすでに悪人で、阿弥陀を信頼するのが一番大事なことなら、倫理的に悪い行動はすべて大丈夫だということになるのではないのでしょうか。そしてそればかりか、悪人であれば、阿弥陀を信頼するのがより易しいなら、悪いことをした方がいいのではないのでしょうか。ある親鸞の弟子がそう思い、自分は阿弥陀を信頼すると言いながら、好きなことを何でもしたのです。このような理由で、いろいろな人、特に、鎌倉幕府が親鸞の教えに反対しました。親鸞の教えが倫理的な悪を許すものなら、よくない教えだろうというわけです。

しかし、親鸞も現代親鸞を研究している学者もそのように批判する人は教えの細かい点が分からないのだと主張します。上田義文先生と廣田デニス先生は親鸞が倫理的な悪を許すという解釈は「恣意的で、勝手な解釈だ」¹と書きました。また、オーバリン大

¹ Yoshifumi Ueda and Dennis Hirota, eds., *Letters of Shinran: A Translation of Mattōshō*, 7.

学のジェームズ・ドッビンス先生はそのように親鸞の教えを解釈した人は「逆の推論をした」のだと考えています。ドッビンス先生によれば、「信念がある人間なら、自由にしてもいいという意味ではなく、悪は信念の刺激」²なのだそうです。 廣田先生とドッビンス先生の解釈によると、阿弥陀を信賴するなら、何をしてもいいと思った人が教えを誤解したということです。なぜかというと、親鸞の手紙を読んだら、親鸞が二つのことを挙げて、悪の行動がよくないと結論していることがわかるからです。

しかし、私は両方の考えには共に問題があると思いますので、親鸞の教えが倫理的な悪を許すと主張したいと思います。そして、皆さんも説得したいと思っていますので、その二つの考えと私の批判を紹介したいと思います。その考えは「末灯鈔」という親鸞の書簡集の手紙に書いてあり、これをこれから「意志的な悪の議論」と「毒を飲む人の議論」を呼びたいと思います。

意志的な悪の議論は末灯鈔の16番目の手紙に書いてあります。悪い行為をしてもいいと思っていた弟子を叱った後、こう書きます。

「その様子もない人びとに悪をしてもよいのだなどと、決していうべきことではありません。悩み煩いに狂わされて思わずも、振舞ってはいけないことを振る舞い、言ってはいけないことを言い、考えてはいけないことも考えるものだと思うのです。それでなくて、人に対して腹ぐるく、振舞ってはいけないことを振る舞い、言ってはいけないことを言うのであれば、それは悩み煩いに狂わされたのではなく、故意に行っているのです。くれぐれも、そうあってはいけません。」

つまり、煩惱でいっぱいの人たちはいつもしてはいけないことをしますが、それは仕方ありません。しかし、意図的に悪をすることは許されないのです。

² James C. Dobbins, *Jōdo Shinshū: Shin Buddhism in Medieval Japan*, (University of Hawaii Press, 2002), 54.

しかし、なぜ意志的に悪をすることは許されないのでしょうか。この質問の答えは親鸞の自力に関しての批判を思い出すと分かります。親鸞によると、意図的に努力することは「我」の存在を信じることだそうですので、意図的に悪をする人は往生できないわけです。このような主張には二つの問題があります。第一の問題は、その説明が正しかったら、意志的に悪をする人の罪と善人の罪は同じになってしまうことです。それに、煩惱でいっぱいの人が皆意志的な行動をします。そうだとすると、皆の行動はよくないということになります。故に、親鸞の議論がなぜわざと悪をすることが特によくないかという質問に答えていません。というのは、皆の罪は同じだからです。悪の行動が禁止されておらず、意志的な行動が禁止されているのです。

二つ目の問題は少し微妙です。親鸞の議論が示したのは、わざと悪をする人は阿弥陀仏の力をまだ信頼していないということです。しかし、悪人にとっては、信頼することが易くなるなら、そして、信頼したかったら、悪人になったらいいのではないのでしょうか。このような重要な質問にも、親鸞の主張が答えられなかったのも、その主張が親鸞の目的を果たしていません。

さて、毒を飲む人の議論を紹介したいと思います。この議論の構造はアナロジーです。親鸞によると悪をし続ける人は毒を飲み続ける人のようです。親鸞はこのように書きました。

(現代語訳) 「しかるに、なお酔いも醒めきらないのに、重ねて酒を勧め、まだ毒も抜けきらないのに、また毒を勧めるなどは、あきれたことです。悩み煩いをもつ身だからと言って、心のままに、振舞ってはいけないことをも許し、言ってはいけないことをも許し、思っではいけないことをも許し、どのようにも心のままにするがよいなどと申すは、かさねがさね不都合なことです。酔いも醒めないのになお酒を勧め、毒も消えないのにさらに毒を勧めるようなものです。薬があるから毒を好めなどとは、言葉にすることではありません。」

一番大事な部分は最後の部分です。薬があるから毒を飲んでもいいというわけではないという考えは説得的だと思います。人は自分が病気だとわかる場合、薬があったとしても、わざと病気を長くするのは合理的ではないでしょう。現在、骨折を治せる治療がありますが、わざと骨を折ってもいいというわけではないでしょう。同じように、阿弥陀の本願があるので、倫理的な悪をしてもいいということにはならないわけです。

しかし、それはいいアナロジーではないと思います。なぜなら、重要な違いが三つあるからです。最初の違いは効果に関する違いです。人は薬があっても、自分の病気を長引かせることは、結局、健康に良くないかもしれないと思うので、わざと病気になることはないと思います。それに対し、親鸞によると、何回悪いことをしても、阿弥陀の本願のおかげで、阿弥陀の力を信じる人は皆、同じように浄土に生まれるのです。

二つ目の違いは感情の違いです。毒を飲むことや病気や骨折などは痛みを招くことです。その状態の人は苦痛を感じています。その状態の人はわざとその状態が続いた方がいいと思う代わりに実態が変わった方がいいと思うに違いありません。一方、倫理的な悪といっても、必ず楽しくないというわけではありません。奴隷を所有していた人は倫理的な悪を行っていたわけですが、そんなに苦しまなかったと思います。捕まえられなかった犯人は多分そんなに苦しまないでしょう。だからこそ、人間がよく悪をし続けるのです。

これらの違いを考慮して、アナロジーを修正していくと、主張の結論が変わるかもしれないと思います。毒は美味しく、健康に悪いのですが、薬を飲んだら、健康に対する害が全部なくなるというアナロジーの方が正しいことになります。この教室にはタバコを吸っている人いますね。タバコは毒なんです、タバコを吸っている皆さんはタバコ

を吸うことが気持ちいいと思うでしょう。もし、無料で、健康上の害を防ぐ薬があったらどうでしょうか。吸い続けたくなるのではないのでしょうか。

親鸞の主張はすでによくないとわかりますが、もう一つの重大な問題があります。たいてい、わざと病気を長引かせても、薬を飲むのがもっとやさしくなることはありません。しかし、それは親鸞の主な主張によると、悪人だったら、阿弥陀を信賴するのがより易くなるのです。それなら、当然、悪をし続けた方がいいでしょう。

以上の理由で、親鸞のアナロジーの考えは良くないと結論しなくてはなりません。ですから、親鸞は自分の教えが倫理的な悪を許さないと主張しますが、その主張の根拠は正しくないので、悪を許すと結論するべきだと思います。

以上で、発表を終わります。ご意見、ご質問などございましたら、お願いします。